バングラディッシュ・インターンシップ体験記

ダッカ NGO(AIESEC)　2ヶ月半

情報学研究科 2011 年卒　伊藤　良平

インターンシップ先

ESDO (Environment and Social Development Organization)＠バングラデシュ

期間　2009 年 11 月 18 日～
2010 年 2 月 2 日

動機

・日本の国際競争力低下や学生の内向きが叫ばれている現状に反抗したかったから。

・このまま普通の大学生活を終えることに漠然と焦りがあったから。

≪一週間のスケジュール≫

	月	火	水	木	金	土	日
	仕事	仕事	仕事	仕事	休み	休み	仕事

前書き

私は大学院情報科学研究科修士１年の冬、AIESEC（アイセック）と言う学生団体が運営する海外インターンシッププログラムに参加した。国はアジア最貧国と言われているバングラデシュ。２ヶ月半と言う短い期間だが、バングラデシュの環境 NGO では現地の人への環境教育の仕事をする機会を頂き、日本の ODA とも深く関わるゴミ処理プロジェクトなどについても学ぶ機会を得た。現在は社会人となり、メーカーで開発の仕事をしているが、時々バングラデシュでの思い出がよみがえり、今でも自分のなかで一つの起点となったと感じている。留学の選択肢としてバングラデシュを選ぶ方はあまりいないと思うが、この国について僅かでも理解する手助けとなってくれればと思う。

1. バングラデシュを選んだワケ

バングラデシュは多くの人にとってまだまだ未知の国であり、留学やインターンの行き先に選ぶ人は少ないのではないかと思う。独立までの苦しい歴史を持ち、アジアの最貧国と言われているバングラデシュ。現在でこそ、グラミン銀行のマイクロクレジットによる貧困層の減少や安い労働力を武器にした世界の縫製工場として注目されているが、当時の自分はこの国のことをほとんど知らなかった。

そんな未開の国で、今経済が急速に発展している。何故か・・？

自分にとってのバングラデシュはエネルギーの詰まった塊のように感じ、この国に行けば、この国に行けば自分達や日本がもっと元気になる方法が見つかるのではないかと感じた。

バングラデシュの街並

2. 渡航準備

実際、えり好んでバングラデシュに行く人は渡航準備にあまり気を遣わないかもしれないが、インターンシップであると言うことを踏まえ事前に行った準備を記したい。
私の場合、基本的な準備としては VISA、保険、予防接種（A 型・破傷風）などを済ませ、現地でお金を引き出せるように City Bank に口座を開設した。

当時はまだ実用的なベンガル語の参考書は無く、ガイドブックは旅行人編集部が出している本だけだったが、内容は充実しており未開の国を楽しむと言う点では特に問題無かった。

その他、行ったこととしては英語の勉強として英語でブログを書くこと、インターン先の活動内容をしっかり調べること、掴みとしてベンガル語の自己紹介が出来る程度に練習することであった。

3. インターンシップ先団体について

アイセックの海外インターンシップではオンラインデータベースに登録されている数千もの企業、NGO、その他学校やアイセックのオリジナルプログラムなどから自分と当該団体とのマッチングで決まる。

私にたまたま縁があり、インターンシップでお世話になったのは「ESDO」と言う環境団体だった。雨期に洪水の多いバングラデシュではポイ捨てしたポリ袋が排水溝に詰まって洪水被害が拡大してしまう。このことが大きな社会問題となったため 2002 年からポリ袋の使用が禁止されたのだが、このポリ袋禁止運動を起こすきっかけとなった洪水被害の拡大に最初に気づいた元新聞記者が起こした NGO が ESDO である。

現在では 10 人程度の小さな団体ではあるが、急激な人口増加で悪化しつつある環境問題に対して子供たちへの環境教育や農村部での職業訓練や学校建設、マイクロクレジットなど多種の支援活動を行っている。

ESDO の職業訓練校でミシンを学ぶ

4. インターンシップについて

インターンシップとしてまず私が行ったことは活動のためのグラント（補助金）獲得であった。インターネットで世界中を探すと環境問題や貧困問題などに取り組む非営利団体に資金援助を行っている支援団体が多数見つかる。そのような団体を調べて、こちらの活動内容や必要資金などを書類にまとめ応募する作業を行っていた。

この作業では改めて非営利団体の活動が如何に難しいかを知った。社会問題を解決するためには現地の人が自分達の力で取り組まないと本当の解決は出来ない。しかしそのような人たちは総じてお金が無く、例えやる気があったとしても満足な活動が出来ず、次第に生活が苦しくなると環境問題への取り組みなどは二の次になってしまうことが多いそうだ。資金援助団体の中には支援地域や金額、テーマなどを制限している場合がほとんどで自分が改めて探したときでもなかなか良い団体は無く、作業は思ったよりも時間が掛かってしまった。

これと平行してバングラデシュの子供たちへ行う環境教育の企画にも関わらせて貰った。環境問題の教育などは初めての経験であり、自分自身何をして良いのかさっぱり分からなかったが、本やインターネットに載っている情報などから見よう見まねでエコバッグの製作やスタディツアーなどを行う企画を立ててみた。そしてこの企画を元に NGO の上司に何度も相談し、修正されながら企画を準備することが出来た。しかし残念ながら私が短期の滞在中に関われたのは企画をする段階までで、実施に関われなかったのは非常に残念であ

った。

この他、仕事では無いが農村の職業訓練施設や ESDO が建設中の小学校を案内して貰い、農村での教育や仕事、生活スタイルなどをいろいろ勉強させて貰ったり、日本の JICA とダッカ市役所が主導して整備中のゴミ最終処分場を見学させて貰ったりした。バングラデシュではお金が掛かるためゴミの焼却処分場が無い。すべてのゴミは分別もされぬままこの地に運ばれ、ピッカーと呼ばれる人たちによって売れそうなプラスチックやガラスなどのゴミがリサイクルへと回される仕組みになっている。ピッカーの彼らはゴミの山で暮らしており、ここでは子供からお年寄りまで 100 人以上が 1 日 100 タカほどの稼ぎをゴミの中から掘り出している。このように貧しいピッカー任せとなっているバングラデシュのゴミ処理システムの改善は非常に重要だと感じ、そこに日本の力が貢献出来ることをとても嬉しく感じた。

このようなインターンシップを通して、環境問題には人の意識を変えることが非常に大切だと考えるようになった。街中にポイ捨てするし、分別しない現状を 1 人 1 人が少しでも変えることが出来るなら状況は大きく改善すると思う。また、環境問題と貧困問題は密接に関わっており、貧しいが故に環境について考えられない人が多いことを教わった。この問題は失業率 40%を超えると言われているバングラデシュでは難題で、就職支援、子供たちへの教育、コンポストやバイオマスエネルギーの利用など、様々な方面から環境問題について多角的に取り組んでいることから人の意識を変えることが難しいか考えさせられた。

。

ピッカーの彼らは埋め立てられたゴミの上に住んでいる

5. バングラデシュでの生活

誰が言ったのか知らないが、バングラデシュの表現として「体感人口 3 億人」と言う言葉を聞いたことがある。実際の人口は 1 億 5 千万程度だが、自我の強い性格、狭い国土、人件費がかなり安いため無駄に多くの人が雇われているなどの理由から実際よりもかなり多くの人がいるように感じる。そんな多くの人が常に我先にと行動しているこの国はまさに喧騒、混沌という言葉が良く当てはまる。(現地の人の話では今でこそマイクロクレジットが広く行われているが、貧しくて周りに構っている余裕が無いため自我の強い自己中バ

ングラデシュ人が多いのだとのこと）

そんなバングラデシュの生活では戸惑うこともあったが全体的には楽しめた。そんなバングラデシュの生活について簡単に記したい。

5－1．衣

どうせ現地で購入することになるのだから何を着ていっても良い。ただ持って行った服は捨てる覚悟がいる。首都ダッカの空気は非常に汚い。比較的排気ガスのきれいな圧縮天然ガスを使用する車が多くなったため以前よりは幾分改善されたが、帰宅後に鼻をかみ排気ガスのせいで黒くなったティッシュを見ると改めて驚くほどであった。そのような理由で服はすぐ汚れてしまい、洗うのも面倒なため T シャツなどを買う機会は多かった。縫製業はバングラデシュの数少ない産業であるため、

民族衣装的なものは女性ならサロワカと呼ばれているワンピース、男性はルンギと呼ばれている腰巻きがある。どちらもカラフルな衣装が多く、見ているだけでも楽しい。

5－2．食

日本で「ご飯」と言ったらお米と食事の両方をさすようにバングラデシュで「トルカリ」と言うとカレーとおかずの両方を指す。

トルカリは総じて旨い。バングラデシュのカレーは比較的日本人にも馴染みやすいだろう。インド料理よりもスパイスが控えめらしく辛いと感じることはあまりなかった。また、具材も牛、ヤギ、鶏肉以外に野菜や魚などを使用するので食べやすいのに加え、ナンやルティなどの小麦粉よりもお米に合うカレーだと感じた。

トルカリの付け合わせに良く出されるボッタ（野菜と塩、マスタード油の和え物）もシンプルだがこれだけでご飯が進むほど美味しいので帰国後は良く作るようになった。

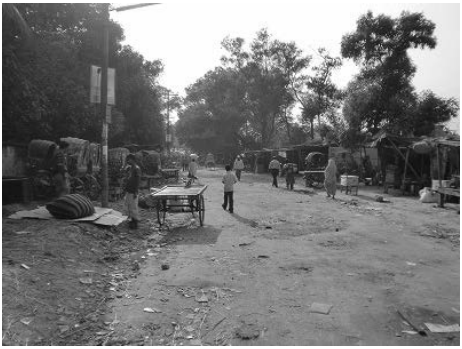
しかしサラダが出て来た時はさりげなく刻んだ生の青唐辛子が混ざっているので気をつけなければならない。彼らはカレーの福神漬け感覚で青唐辛子を食べるので安易にマネをすると痛い目を見ることになる。

5－3．住

バングラデシュには DOHS と呼ばれている住宅地区が幾つもある。地区全体が高い壁で囲まれ武装したガードマンが管理する地区であるため、周辺よりも比較的安全で裕福な人や外国人なんかが多く住んでいる。

私はバングラデシュのアイセックメンバーに手伝って貰い、アパートの一室を借りて生活していた。家賃は 8000 タカ（１万円ちょっと）と高い。家具などの備品は無く、もちろんシャワーは水しかでない。トイレは水洗だが自分で水を汲んできて流すタイプ。近くのモスクから流れるお祈りのせいで朝 5 時に起こされる。なんだか良く分からない虫たちとも仲良くなった。などなど最初は不満もあったが、いつの間にかこのような生活にも慣れ、ことある毎にお金を強請ってくるアパートのガードマンも簡単に追い払えるようになり、だんだん強くなったなあと実感するようになった。

ところで、テレビを持っている家庭はあまり一般的では無いのか、彼らの大好きなクリケットの試合を放映している日は電器屋の前に多くの人だかりが出来るため昭和時代か！と心の中で突っ込みを入れるのがしばらくの間はマイブームだった。



家の近くにある下町

6. 所感

正直、2ヶ月半と言う短いインターンシップ機会で自分のスキルが大きく向上したとは思っていない。ただそれは悲観することではなく、大学生の今、日本では決して出来ない経験をすることが出来たと言う事実がこれから先、自分の価値観に影響を与え、選択肢や判断を変えるきっかけとなると思う。

例えば、バングラデシュ人は積極的な人が多い。不便な生活やインフラが整っていないからこそ自我が強く積極的に行動を起こせる人が多いと感じた。英語の練習がしたいからと言って突然話しかけてきた学生、バスの中でなんの変哲もないボールペンや料理のレシピ本を多数売りさばくセールスマン、バングラデシュで生活のサポートしてくれた現地アイセックメンバーの大学生など優秀で見習うことも多い。もしバングラデシュが日本と同じ程度の生活水準だったら日本よりももっと優れた国になっているかもしれないと感じた。

便利な国に暮らしているからと言って胡座をかいてはいられない。どんなに周りの状況が変わろうともその中で自分がどのような存在であるべきか、目指していくべきか周りに甘えることなく自分が変わっていかないとだめと言うことを感じた。今の自分はこのインターンシップで出会った彼らに負けている、将来、仕事で世界中の人と関わる機会はきっとあると思う、そのときのためにまだまだ努力していかなければと言う気づきを貰った。

7. 海外インターンシップのその後、現在

海外インターンシップを終え、帰国した 2 月から就職活動を行った。多少の焦りはあったが、実際理系の就職活動はこの時期からでも特に遅くなかったのでそのあたりは心配がいらなかった。

選考では大学院での研究がメインテーマではあるが、海外インターンシップの経験という事実は面接官の方の食いつきが非常によく、自分自身も良い経験だったと感じているので自身のことを魅力的に伝えることが出来た（一つ自信のあることを話せればそこから他の内容についても話を広げ易かった）。また、イレギュラーの質問などに対しても、インタ

ーンシップでバングラデシュ人とたどたどしい英語やベンガル語で会話できた経験の後では常に自信をもって応対することが出来たと感じている。

縁あって入社したのは精密機器の開発部だった。開発職というと営業や生産と違って国内で完結する場合が多く、海外インターンシップの経験はあまり役に立たないと思われるかもしれないが、インターンシップ時に身につけたどんな時も物怖じせず対処すること、（英語が苦手だった自分ため）人にわかりやすく伝えることなどが経験として活きているように思う。私の会社は比較的海外売り上げ比率が高く外国人が多く海外に行く機会も多数あるが、今後自分にそのような機会があった場合でも抵抗なくすんなりと行けるだろうと思っている。そしてその時は日本で仕事をしているときと同じくらいの力を発揮できるように早くなりたいと思っている。

8. 最後に

こんな勉強が何の役に立つのだろうかと思いながらも覚えた数式が意外なところで使われていたり、何気なく見聞きした雑学が役立ったりする経験は多くの人が持っていると思います。私は短期の海外経験も似たようなものだと思っています。これから海外へ行く皆様、日常の些細な出来事を見落とさないようにしてみてください。可能であれば毎日、日記を付けるのはどうでしょうか。

友達とのパーティや観光、留学なら授業のことなどはきっと印象的に残ると思います。しかし、捨てられているゴミ、現地の子供たちの振る舞い、渡航前に手に入れた現地情報と実際との差違など見過ごされがちだけど気づきの多い出来事はたくさんあります。

小さな気づきを大きく活かせるように。一つ一つの経験が将来自分の価値観を変え、判断を後押ししてくれる材料になると思います。皆様の海外経験が忘れられない素晴らしい経験となり、本当の自分がどうあるべきか考えるきっかけとなりますように。

気が強くて、いつも真っ直ぐな彼らからは多くを学びました。

≪インターンシップアンケート≫

① おすすめ（ガイドブックにないスポット、観光地、店、お気に入りの場所、食事 etc.）

・ボナニのバス停（混みすぎてて見ているだけで面白い、ここでバスに乗れるかが日本人とバングラ人の差）

・ドミオク（ボナニ 11St. にある韓国料理とパン屋が泣くほど美味しい。ビールもこっそり飲める）

・知識人犠牲者の碑周辺（このあたりのスラム街は洪水に耐えるため高床式になっている。とにかく人の生きる力みたいなのが凄い。）

② マナーやタブー

イスラム教なので左手は使わない、お酒・豚肉は食べないなど基本的なことが守れれば問題ないです。

③ 持っていってよかったもの（重宝したモノ、喜ばれた日本のモノ、ウケた特技　etc.）

折り紙（鶴しか折れなくても大丈夫）

虫除けスプレー（蚊は 1 年中大量発生している）

発音してくれる電子辞書

デジカメ（子供にウケる）

④ インターンシップ前の必見本　or　ウェブサイト

「バングラデシュ」　旅行人編集部